試練の夜に

ドラゴンクエストXI

試練の夜に

哀華

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8742327

DQ11, ドラクエ11, カミュ, マルティナ, ベロニカ, セーニャ, カミュベロ, DQ300users入り

DQ11/カミュベロ、ほんのり主エマ＆グレマル
※ネタバレ含む。魔王討伐後のイベント「ネルセンの試練」を題材にしたお話です。
※やんわりですが、会話や空気に大人向け要素が入る部分があります。主エマとカミュベロを前提としたイレブンとカミュの会話や、ベロニカに対して男思考のカミュがいますので、好物の方はぜひともお付き合いください。

ネルセンの試練まで辿り着いた私「なにこの選択肢ちょっと可能性が無限大すぎてイレブンを絡めてカミュベロ書くしかないのでは？」
明らかにいかがわしいご褒美に滾った結果いろいろ詰め込んでこうなりました。
イレブンとカミュのやりとり、書いていてものすごく楽しかったです……。

※表紙素材はコチラ（illust/55607090）からお借りしました。ありがとうございます。

試練の夜に

試練の夜に

「まさか古代勇者ご一行の中でも英雄と謳われた偉大なる戦士様があんなこと言いだすなんて思わなかったわ」

　不機嫌そうにぼやいたベロニカの一息を拾って、凛とした眼差しにいくらか呆れを含ませたマルティナが、そうね、と頷く。心当たりのあるイレブンと、何故だかその祖父にあたるロウが、ギクリとして曖昧な笑顔を浮かべている。

　ネルセンがつくった奇怪なダンジョンのうち最初のひとつを攻略した一行は、疲労を癒すため蒸し風呂のあるホムラの里を訪れていた。
　強敵を倒しながら最高級の武具を手に入れ、ネルセンの選んだ手練れに挑み、打ち勝つこと数回目。武具のレシピは真っ先に入手し、サマディーの最上位レース開催も約束され、イレブンはちゃっかり幼馴染との結婚の意を表明し…と、ネルセンが用意した褒美を一つずつ勝ち取っていった。己を磨くために試練を利用しているので、褒美があってもなくてもダンジョンに潜ることは変わりないのだが、ネルセンの選んだ手練れを倒した後、あのイレブンが厚意を断われる筈もない。
　戦士ネルセンの言い知れぬ圧力に負けて、イレブンは残り少ない選択肢の中からアレを選ばざるを得なかったに違いない。そう思ってはいるのだが、流石に女性陣の胸のうちには複雑なさざ波が立った。なにせ本日イレブンが選んだ褒美は、「エッチな本が読みたい！」なのである。

　いつもなら不穏な気配を漂わせる仲間を宥める立場にあるセーニャだが、流石に今回ばかりは庇い立てしづらかった。じっとりとした目を向けているベロニカとマルティナ、困り顔のイレブンとロ

ウ、こめかみに脂汗を浮かべたグレイグ、飄々としているカミュ…それぞれの様子をうかがって、セーニャはやはり何も言葉が見付からない。
　ダンジョンを出てからそこはかとなくギスギスした空気を放つベロニカとマルティナ、男性陣に挟まるかたちでオロオロしていると、宿の手配を済ませたシルビアがびしりと蒸し風呂のポスターを指差した。

「さぁ、汗と疲れと諸々を流しに行くわよ！」

　諸々、に含まれる鬱憤に心当たりのあるイレブンやロウ、グレイグは黙って頷く。ベロニカとマルティナは冷ややかな眼差しで、ネルセンからの褒美が入った道具袋を背負ったカミュを一瞥し、セーニャとシルビアと共に部屋へ向かっていく。
　肩を怒らせる女性陣を見送って、緊張状態にあった男性陣はぐったりと息を吐く。言葉にしづらい居たたまれなさを前に、堅牢な甲冑も形無しだ。
　申し訳なさそうに肩を落とすイレブン、慰めるように己のことを語りだすロウ、厳つい顔のまま聞き入るグレイグ。ロビーで何してるんだか、と道具袋を担ぎなおしたカミュは、傷を舐め合う３人に行こうぜ、と促した。
　まったく、そこまで卑屈になることでもないだろうに。男としてそういうコトに興味があるのは当然だ。イレブンが断りきれなかったのは性根に因るところもあるだろうが、残りは興味に違いない。可愛い幼馴染が居るのは知っていたが、色恋沙汰に関してはあまり話題に上がることはなかった。寧ろイレブンも年相応の男でよかったと思うくらいのカミュであった。

「辛気くせえ顔するなよ。男なら興味を持って当然だろ」

　悪びれることなく言ってのけると、イレブンもようやく肩の力を抜いて、うんと頷いた。

＊＊＊

　じわじわと噴き出してくる汗が身体中を伝い落ちて行く。蒸し風呂用の衣類に着替えたベロニカは、むすっとしたまま椅子に腰掛けて、白い視界を睨んでいた。どうにも胸の奥が、視界を覆う蒸気以上にモヤモヤとしている。
　伝説の勇者の仲間だというから尊敬していたのに、あんな一面があるなんて！　勇者を守り導く使命を持って生まれたベロニカからしてみると、理想を砕かれたようでショックだった。男性なのだからそういう面があっても仕方がないとはいえ、わざわざ褒美として用意するようなものでもない。

　イレブンはともかく、鼻の下を伸ばしていたロウや、興味の色を隠せないグレイグにも驚きだ。体力も魔力もギリギリのところで勝利を得たのに、そんなもので元気を取り戻すとは何事か。嘆かわしい、とマルティナもこめかみを引きつらせていた。今まで散々ロウのだらしない顔を見てきているのに、よもや伝説の戦士とグレイグまでもがだらしない顔を見せたので、呆れを通り越してしまったのだろう。
　ベロニカを挟むかたちで逆隣に腰掛けたセーニャは、褒美を与えられた時からずっと、苦笑いを浮かべている。

「なんだって試練の褒美があんないかがわしいものなのよ」

　語気を強めるベロニカ。ちらりと見えた表紙は肌色だった気がする。本を受け取った状態のまま試練の里に飛ばされたせいで、イレブンはひどく狼狽えていた。
　あわあわと本を抱き込んで隠すしかないイレブンに助け船を出したのは、それまで黙っていたカミュだ。

「イレブン、しまっとくぞ」
「う、うん」
「まあ、別に普通のことだろ。見たいヤツは好きにしろ」

　場の空気をなごませようとしたのか、興味のある人物に対しての気遣いなのか分からないが、カミュはなんでもないように軽く笑って道具袋に問題の本を押し込めた。

　ああ、思い出したらなんだかモヤモヤが濃くなってきた気がする。不機嫌を分かりやすく顔を出したベロニカに呼応するように、マルティナもロウやグレイグに対するあれこれを吐き出しはじめる。不幸なことに女風呂は貸し切り状態で、頼みの綱のシルビアも流石にここには居ない。

　ただ、ベロニカにしろマルティナにしろ、言い換えれば憎からず思っている相手への不満に近いものを吐露しているように聞こえる。フォローを入れることもできず、曖昧に笑っていたセーニャだが、要するに、いかがわしい本に興味があるのに自分には一切そういう気配を見せないとは何事だ、と解釈した。身も蓋もない言い分であるが、ストレートに言ってしまえばそれが結論だろう。２人とも、自覚があるかどうか怪しいところだが。

　セーニャからしてみれば、いじらしくもある２人の仲間の声が風呂場に響く。男性側の風呂の話し声や物音も聞こえるが、イレブン達はとっくに上がっているだろう。こちらと違い、いかんせん男性はお風呂が早い。待ち合わせをしているわけでもないし、もう宿でそれぞれ寛いでいる頃合いだろう。
　そう思うと、セーニャもようやく肩の力を抜ける。うんと伸びをして、２人の会話に加わった。

「そんなに気になさらなくても、カミュ様もグレイグ様も、お姉さまのこと、マルティナ様のことをよく見てますわ」

＊＊＊

　危うく、口に含んだ水を噴き出すところだった。脱水症状回避のため設置されていたサービスの水を、なんとかこぼさず飲み下す。先に飲み終えていたイレブンが、横で目をぱちくりさせて、恐る恐る女湯のほうへ意識を向けている。

「…なんか、妙な流れになってねえか？」

　引きつり気味の顔で、カミュが呟く。
　女湯のほうは和気藹々と盛り上がっているようだが、話題が実によろしくない。
　女性陣が宿から風呂へ向かってだいぶ経っているからか、もう男性陣は男湯から出たものだと考えているのだろう。事実、シルビアやグレイグ、ロウはそれぞれ先に風呂を済ませてとっくに宿に戻っている。荷物整理をしていたイレブンとカミュは、彼等と入れ違いで蒸し風呂へとやって来たので、あながち女性陣の考えも的外れなものではない。

　入ってすぐに女湯から耳慣れた声が聞こえてきて、問題の褒美についてやかましく議論をかわしているのが分かり、恥ずかしそうに項垂れたイレブンをからないながら慰めていたのだが、どういうわけか話の流れが変わっている。聞き耳を立てるのもどうかと思い、極力気にしないよう努めていたのだが、流石に自分の名前が出てこられると無視できない。それも、なんだか妙な雲行きだ。
　ベロニカ本人から悪口を言われるのならまだしも、なんでセーニャとマルティナからあることないこと吹き込まれて上擦った声を漏らしているんだ、あのおチビちゃんは。

「今日だって、落とし穴に落ちそうになったお姉さまを助けてくださったじゃないですか」

「そうだけど、でもあれは完全に子ども扱いしてたでしょ…！」
「どこが？」
「助け方よ、助け方！　抱っこされてるみたいで、恥ずかしいったらありゃしない」
「カミュ様、そのままお姉さまを抱っこして歩いてましたね。
ちょっとの間でしたけど」
「ほんっと、アイツはあたしを子ども扱いするんだから…！」
「ああ…。でも、たぶんカミュなりに気を遣ったんだと思うわよ。私だって同じようにするし」
「え？」
「ベロニカは確かにすごい魔法使いだけど、身体は子どもだから心配になるのよ。腕を掴んで引き上げると力が入りすぎて痛いだろうし、胴体を抱えたほうがバランスも取れるし、痛みも少ないでしょうから。抱っこは…まあ、カミュがしたかったんじゃない？」
「は？　抱っこしたかったって言うの？　カミュが？」
「たぶんね。宿に戻ったら聞いてみる？」
「…もう！　マルティナさん、からかわないでよ！」

　女湯のほうは、随分と朗らかな空気になったようだ。ひとりを除いて、言わなくてもいいことをペラペラと楽しげに解説している。
　姿かたちが子どもだと、例えセーニャと同い年と分かっていても、気になってしまうのは仕方ない。兄貴の性だ。
　ベロニカが偉大なる魔法使い様なのは認めるが、危なっかしくて放っておけないのも本当だった。

「…でも、カミュはあの褒美を受け取った時も、いつもと変わらなかったわね」
「そうですわね。落ち着いておられました」
「……きっと慣れてるのよ」
「慣れてる…か」
「そうよ。そうじゃなきゃ、むっつりスケベってヤツよ！」
「まあ、お姉さま。声が大きいです…」
「むっつりスケベね…。だとしたら、ベロニカが一番危ないんじゃ

ないの？」
「…え、なんでそうなるのよ？」
「カミュのベロニカを見る目、ただのお節介とは言えないんじゃない？」
「そ、そんなわけ、」
「いいえ、お姉さま。カミュ様は特別、お姉さまを気にかけていらっしゃいます」
「それは、あたしの姿が子どもだから…」
「ベロニカは分からないかもしれないけど、周りからすると、それだけじゃないように思えるの。セーニャは？」
「はい。私もマルティナ様と同じ意見です。だってカミュ様、いつも目がお姉さまを追ってますもの」
「あ、やっぱり。私も気になってたの」
「ええ、私の目は誤魔化せませんわ」
「ちょっと…何それ……」
「だから、カミュはベロニカのことが好きなんじゃない？」
「お姉さまも、カミュ様のこと、お嫌いではないですよね？」

　仲間として、の境界を超えた目線で見守っていた節が少なからずあるとは思うが、そう不躾に色恋沙汰に結びつけるのもどうなのか。
　漏れ聞こえてきた会話がヒートアップしていき、降りた沈黙をどう受け止めればいいのか分からない。諸々のダメージを受けていると、にこにこ笑ったイレブンに、ぽんと肩を叩かれた。

「図星でしょ、カミュ」

　相棒の笑顔はどこか無慈悲だ。隠さなくていいよ、と言外に告げている。

「…オレはお前らにロリコンだと思われてるってことか？」
「まさか。みんなベロニカの本当の姿を知ってるし、カミュを応援したいと思ってるよ」

「待て待て、だからどうしてオレがあのおチビちゃんに好意を抱いてるってことになるんだ」
「え、違うの？」

　ひそひそ声で応戦すると、イレブンの無邪気な瞳が悲しげに揺れる。でもベロニカはカミュのこと好きだと思うよ、なんて訴えてくる真っ直ぐな眼差しに負けて、カミュは大きく溜め息をつく。

「…そういうのは、全部終わってからのほうがいいだろ」
「なんで？」
「お前な…」
「だって僕なんか、この前エマと結婚したよ」
「そりゃそうなんだが…」

　珍しく譲らないイレブンに困惑しながら、誤魔化すように頭を掻く。
　歯切れの悪いカミュにずいっと踏み込んで、真摯な炎を宿したイレブンは言った。

「後悔しないように、ちゃんと話したいこととか、聞きたいことは聞いておいたほうがいいよ。カミュもベロニカも、死なせはしないけど…大事な話は、きちんとしてあげてほしい」
「……」

　時折、イレブンはひどく遠い目をしていることがある。切なさと寂しさと悔しさ、懐かしさをごちゃ混ぜにしたような儚げな横顔を、何度か目にしているからか、切羽詰まったイレブンの言葉を真っ向から払いのけることができない。それに、イレブンの言葉には、妙な説得力があった。

「…守る側のオレたちが、勇者様に守られてちゃダメだろ」
「カミュ、」

　守られる側に心配されて、胸がざわつく。イレブンの願いに呼応

するかのように脈を打った心臓が、何かを急かすように熱くなった気がして、カミュはやれやれと片手を上げた。

「でもまぁ、そうだな。ちょっと考えておく」

　降参のポーズともとれるカミュの笑った顔に、イレブンは表情を明るくした。

＊＊＊

　すっかり蒸し風呂で火照ってしまったベロニカは、心配するセーニャとマルティナに、ちょっと涼んでから戻るわ、大丈夫だから、と念押しして背中を見送った。
　赤いローブと同じように色付いた頬っぺたを鏡の中に見付けて、ふいっとそっぽを向く。サービスの水を一気に飲み干してぼんやり時間を潰したあと、風呂屋を出てホムラの里をぶらぶらと歩いた。ひんやりとした夜の空気を吸い込むが、胸の奥にはまだよく分からないモヤモヤが鎮座している。

　セーニャとマルティナに言われたことを整理するためには、頭を冷やさなければならない。あのままの調子で宿に戻っても、今度はシルビアも混ざって女子会が開催されるに違いない。そうなった場合、シルビアに甘えるようなかたちで、抑えてきた想いを吐き出してしまいそうだった。
　邪神を倒すため旅を続ける勇者一行として、そんなことに現を抜かしているわけにはいかない。
　そもそも、カミュはベロニカのことを子ども扱いするばかりで、女としては見ていないのだ。ベロニカはそう信じて疑っていないのだが、セーニャとマルティナはふるふる首を振り、カミュはベロニカを特別扱いしている、と口を揃える。その特別扱いに対する主張

が、ベロニカ本人とセーニャ達とはまるで正反対なのだ。

「まったく、わけが分からないわ…」

　心にはマヌーサがかかっているような状態なのだから、これ以上の混乱は避けたい。セーニャ達はまだまだ話し足りない様子だったが、ベロニカはもうオーバーヒートしそうだった。

　かぶりを振り、湯冷ましも兼ねて一人で里をうろうろする。もう時間も早いとは言えず、親切に迷子かと声をかけてくる者もあったが、その優しさに触れる度、やっぱり今のあたしは子どもなのよね、と溜め息がこぼれた。
　自然と人混みを避けるように、ベロニカの小さな足は大通りを避ける。辿り着いた里の外れて、なんとなく夜空を見上げる。勇者の星が落ちて魔物は凶暴化したものの、そこに浮かぶ星々は綺麗だった。

＊＊＊

　酒場に来て早々、酒を注文するイレブンに付き合うかたちで、カミュも同じものを注文する。
　酒は嫌いではないので最初から飲むつもりだったが、珍しくイレブンも初っ端から酒だ。蒸し風呂での一件について、腹を割って話そう、ということらしい。

　例の褒美（いかがわしい本）についてからかいすぎただろうか、と思う反面、イレブンが心底からカミュとベロニカのことを案じている気配もあった。
　カミュ自身はあまり態度に出しているつもりもないのだが、先ほどのセーニャとマルティナの猛攻を思い出すと、そうとも言えない

ようだ。下手をすると、気付いていないのはベロニカ本人だけという可能性もある。ベロニカに勘付かれていないのは不幸中の幸いかもしれないが、仲間からそういう目で見られているのかと思うと、むず痒くて眉が寄ってしまう。

　そういったことを含め、素面ではなかなか話す気になれないと踏んでの酒だったのかもしれない。
　お互い空腹だったので、適当に食べられるものも頼んだ。先に運ばれてきた杯を掲げて、まずは一口。ホムラの酒は舌触りも良く、喉越しが良い。度数が強いので、慣れていない者にはお勧めできないが、カミュはこの味が気に入っていた。

「しかし、シルビアはセーニャ達と飯食いに行くって言ってたけど、爺さんとグレイグはどうしたんだ」
「あー、うーん…。あの本が気になったんじゃないかな」

　もごもごと声を小さくするイレブンとは逆に、カミュは膝を叩いて笑う。男のロマンに素直なロウは分かるが、堅物のグレイグも興味を示したことが面白い。聞けば、グレイグもなかなかあの手の本には詳しいらしい。

「へえ。お前そんなことよく知ってるな」
「前にたまたま…」

　ドゥルダ郷の名を出しながら苦笑いするイレブン。
　おいおい、そんな娯楽の少ない修行場でなにがあったんだよ。気にはなったが、あまり突っ込んで聞くと、グレイグの威厳が崩れ去ってしまいそうなので止めておく。

「イレブンはどうなんだ？」
「え？」
「ああいうの、興味くらいはあるんだろ？」

　ちょっとは、と控え目な返答があると思っていたのだが、イレブ

ンの答えは意外なものだった。

「そりゃあそうだよ。僕だって男なんだし」
「お、勇者様はそっちもイケるクチなのか。こんなことに話す機会もなかったから、てっきりそんなでもないのかと」
「あんまり変わったのは趣味じゃないけど、人並みには興味あるよ」
「まぁそりゃそうだわな。結婚もしてるし」
「…カ、カミュこそどうなの？」

　幼馴染との結婚について語るのは、まだ恥ずかしいらしい。どもりながら質問してくるイレブンに肩を竦める。

「結婚か？」
「いや、そっちじゃなくて…」
「ああ、本のほうか。まあ、あのネルセンが褒美として用意したってんなら、どんなものか興味はあるな」
「今更だけど、カミュってどういう女の人が好みなの？」
「あ？　…好みねぇ」
「気の強い子が好きそうだけど」
「……」
「ベロニカのことはどう思ってるの？」
「…なんだってお前はそう直球なんだ。誘導尋問にゃ向かねえぞ」
「あははー。今夜は無礼講かなって」
「ほー、無礼講か。そういうことなら、オレだって訊くが」

　ホムラの酒はイレブンにはちょっとばかし刺激が強いのではないかと思って隣を見ると、案の定もう顔を赤くしていた。邪神との闘いが近いのもあって、いつになく踏み込んでくるわけだ。やれやれと肩を竦めるものの、悪い気はしない。

「女には興味ないみたいな顔してるヤツほどむっつり、って噂だぜ？」

「そんなことないよ。普通だってば」
「どうだか？」

　からかうように尋ねると、むきになって否定するあたり怪しい。
　運ばれてきた食事に手をつけながら酒も勧めると、酔っ払って口が軽くなったイレブンがぽつぽつ漏らしはじめる。
　予想はしていたが、幼馴染以外とは縁がなかったらしい。眼中になかったとも言えるが、その一途さはイレブンらしかった。
　珍しく下世話な話も込みで盛り上がり、自然と酒のペースも上がっていく。石焼きの混ぜご飯や焼き鳥をつまみ、騒々しい酒場の隅で笑いながら、ふと考える。

　仮にベロニカが大人の姿に戻れたとして、そういう関係に発展した場合、自分はどうなのだろうと。預言者の力を借りて一瞬だけ本来の姿に戻ったベロニカを見たが、確かに美人だった。女性らしさは圧倒的に妹のほうが上だが、勝ち気な瞳とすらりとした身体つき、柔らかく白い肌に流れる金髪は文句のつけようがない。特にカミュに対して強気な発言ばかりのベロニカが、ベッドの上だとどういう反応を示すのか興味があった。その姿を誰にも見せたくないとも思う。そういう時くらい、素直に可愛いって言ってやれば、少しはベロニカもしおらしくなるのだろうか。
　想像に欲が混じりはじめ、蓋をした想いが胸を叩く。ついあらぬ物思いに耽ってしまい、不思議に思ったイレブンが首を傾げた。

「カミュ、なに難しい顔してヘンなこと考えてるの？」
「…お前、失礼だな」
「でも当たりでしょ？」

　顔は赤いし言葉もふにゃふにゃしているが、酒に呑まれたわけではないらしい。
　侮りがたいイレブンの追求から逃れようと傾けた杯は、既に空っぽだった。店員に追加の酒を注文すると、それを待っていたかのように、人畜無害な顔をした勇者様が爆弾を投下してくる。

「カミュって手先が器用だし、ベロニカからかって遊んでるし、夜もそんな感じなのかなあ」
「ぶっ……おいおい、オレは変態かよ…」
「でもできるでしょ、ヘンな縛り方とか」
「まぁ、やれって言われりゃできなくもないと思うが…。したことはねえよ」
「ふーん。ベロニカも大変だなあ」
「何でそうなるんだ…」
「だってカミュ、ベロニカ以外に興味ないでしょ？」
「……お前、今日はやけに絡むな」
「あの本で散々からかってくれたお返しに」
「ひでえな相棒、助け船も出したじゃないか」
「うん、ごめん。楽しいだけ」
「そうかよ！」

　あっけらかんと答えて呑気にあははー、と笑ったイレブンの潔さにつられて笑ってしまう。まったく楽しい夜だ。
　注文した酒をあおりながら、しばらくイレブンと馬鹿馬鹿しいやりとりに興じた。

　やがてイレブンと飲んでいた酒場に、ロウとグレイグもやって来た。３０分ほどは席を共にしたが、少し外の風に当たりたくなったカミュは先に店を出た。例の本の話でまた静かに盛り上がっている３人を眺めるのも面白いが、一人で考えたいこともあったのだ。

　酔いを覚ますように夜風に当たりながら宿屋に戻ると、ロビーでシルビアとセーニャが困り顔を突き合わせていた。どうしたのかと訊くと、風呂屋からベロニカが戻らないらしい。涼んでから行く、と一人残ったとのことだが、それにしては随分と時間が経っている。
　マルティナは念のために風呂屋でベロニカを探し、セーニャは宿

屋で待機、シルビアが町中を探し歩いたようだが見付からない。聞けば３人とも晩ご飯がまだだと言うので、腹が減ったろ、オレが探しとく、とカミュはベロニカ捜索を申し出た。
　でも、と心配の色を濃くするセーニャに、気配は近くにあるんだろ、と訊く。こっくり頷いたセーニャに、なら大丈夫だろ、探してくると告げて背を向ける。シルビアからは、カミュちゃん、悪いけどよろしくね～、との声援を受けて、ひらひら片手を振った。

　宿の外に出て、息を吐く。暖かいとは言えない気温だ。
　まったく、お子様は迷子が仕事かよ。ぼやいて、ベロニカの立ち寄りそうなエリアを思い浮かべる。

　実のところ、ベロニカが街中でふらりと姿を消すことは珍しくない。そんな時は大抵カミュがベロニカを迎えに行っていた。職業柄、町の裏道やきな臭いエリアは把握している。
　ベロニカが姿を消す先は、人気のない場所が多かった。
　どうも考え事をする際、一人になれる自然な環境を好むようだ。港町では海の側や海岸沿い、山奥の村では林の入り口や高台の奥…故郷ラムダの静寂の森でよく遊んでいたそうなので、やはり自然に囲まれた場所が落ち着くのだろう。

「…となると、あの辺か」

　今までの経験から当たりをつけたカミュは、酔いを振り払うよう一息つくと、しっかりとした足取りで歩き出した。

　ホムラの里の入り口から見て左手には、鍛冶場と長い階段がある。階段の麓には立派な鳥居があり、見上げれば奥にも２つ、鳥居が聳えていた。階段の先には、この里を守る巫女、ヤヤクの社がある。昼間はそれなりに人が多いが、夜ともなれば話は別だ。里の者にとって、ここは神聖な場所なのだろう。
　長い階段を登りきり、真っ赤な鳥居をくぐり抜ける。社の周囲に

人は見当たらない。左側には壺が積み上がっている。そちらへ足を向けて柵を乗り越えれば、高台から山の向こうを眺めるベロニカの姿があった。

「落ちるなよ、おチビちゃん」
「…そんなヘマしないわよ」

　声をかけると、いつもと違って覇気のない声が返ってくる。
　頭上に広がる空に近い静けさを伴った様子に首を傾げながら柵を越え、しゃがみこむベロニカの横に立つ。ベロニカは黒い山並みに視線をくれたままだった。もう二言三言かけてみたが、なしのつぶてだ。

「今夜は威勢のいいおチビちゃんは留守か」
「……」

　とりあえずの目的は果たしたので肩の力を抜こうとしたものの、どうにも上手くいかない。
　ベロニカの様子がおかしいことが引っかかる。引っかかるのだが、実のところ、それはカミュも同じだった。酒は飲んでも呑まれるな、呑まれてはいないが酔っている自覚はあった。

　軽口を叩くこともない小さな背中からは、拒絶の意思さえうかがえない。
　つま先を地面に立てて、どうしたもんか、と夜空を見上げる。

　先ほどイレブンから散々焚き付けられて、普段は押し込めている気持ちが胸を叩いてるのは分かっていた。
　酒の力を借りるのは不本意ではあるが、ひょっとしたら今このタイミングはチャンスなのではないか、とも思う。星も綺麗で人気もないのだ。シチュエーションは悪くない。

　しかし、踏ん切りがつかない。ベロニカの様子がおかしいことが気掛かりで、まずはそっちから片付けるべきだろう。

ベロニカの隣にしゃがみこんで声をかけようと顔を覗き込むと、ベロニカは己を抱くようにして唇を結んでいた。
　いつもは血色のいい頬も白く、唇は紫に近い色に見える。そこでようやく体調不良の可能性に気が付いて、能天気なことを考えていた自分に腹が立った。
　青白い頬に手を当てると、驚くほど体温がない。やはり具合が悪いらしい。思わず舌打ちして、虚ろな目をしているベロニカを抱き上げる。

「っ、ちょっと…！」
「湯冷めしたんだろ。宿に戻るぞ」
「下ろして……！」
「病人は大人しくしてろって」

　抵抗してくるベロニカの声、肩や背中を叩く手も、普段と比べて弱々しい。
　ひんやりとした小さな手が、酒で火照った首筋を掠める。冷えきった身体に眉を顰めて、ぽんぽん、と背中を撫でる。ついでに夜風から守るように頬へ手のひらをあてがってみると、ベロニカが息を飲んで項垂れた。どうやら観念したらしい。

「……お子様で悪かったわね」

　悄然とした声音に調子が狂う。これはよほど具合が悪いようだ。
　腹壊してなきゃいいが、と心配のあまり小さな頬をなぞるように触れる。
　普段なら迷うかブレーキのかかる行為だったが、酒のせいかイレブンの言葉がこびり付いているからか、つい優しく撫でるように包んでしまった。

「……っ」

　ハッとしたものの、今更手を離すのも薄情な気がした。恐る恐る

ベロニカへ目をやる。
　ベロニカは黙って肩口に頭を預けていた。フードに隠れて顔は見えない。そのまま数秒、ベロニカは動かなかった。
　嫌がる素振りがないことに安堵と居心地の悪さのようなものを感じる。首筋にかかる弱々しい呼吸に唾を飲んだ自分に気が付いて、こんな時にどうかしてるぜ、と宿への道を急いだ。

　宿に着いてすぐ、店主に仲間のことを訊いてみる。
　ベロニカの世話をするなら、セーニャ達のほうが良いと考えてのことだ。ベロニカもそのほうが落ち着くだろうと思っていたのだが、どうやらセーニャ達はまだ食事から戻っていないらしい。
　壁時計を見やると、ベロニカを探しに出てから、まだあまり時間が経っていなかった。
　仕方ないので、店主に伝言を頼んで自分の部屋へ向かう。ぐったりしているベロニカは、女性陣の不在に頷いて、とぼとぼとカミュの後に続いた。

「セーニャ達もイレブンもまだしばらく戻ってこねえだろうから、とりあえずここで休め。オレのベッド使っていいから寝てろ」
「あら、ありがと…」

　ランプの灯りでぼんやりと照らされた手前のベッドを指差す。
　小さく礼を言ったベロニカがベッドによじ登るのを見届けて、しっかり毛布をかけてやった。

「寒いか？」
「…さっきよりマシよ」
「飯はどうする？　宿の主人に訊いたら、簡単なものなら出せるって話だったが」
「……いい」
「温かい飲み物はいるだろ？」
「うん…」

頷いたベロニカにちょっと待ってろと言い残し、部屋を出る。
　ロビーに戻り温かい飲み物を注文すると、事情を察した主人が気を利かせて、ホカホカストーンが詰まった麻袋も用意してくれた。なるほど、と感心しながら受け取り、礼を言う。湯冷めしただけなら、身体を温めれば体調も良くなるだろう。

　部屋に戻って湯気の立つ湯呑みを渡すと、上半身を起こしたベロニカがちろちろとそれを飲みはじめる。
　主人からの厚意で拝借したホカホカストーンの麻袋をベロニカの足元に潜り込ませると、布団を捲られてぎょっとしたベロニカがジロリと睨んできた。そのまま文句でも言いそうな目付きだ。
　宿に戻ってきて気が抜けたのか布団効果か、元気を取り戻しつつあるようだ。

「…な、なに？　コレ…暖かい」
「宿の主人が気を利かせてくれてな。お大事に、だってよ」
「……そんなに体調悪そうだったのね、あたし…」
「青っ白い顔してたからな。まあ、暖かくしてれば良くなるだろ」
「不覚だわ…」

　ずず、とお茶をすする。まだ覇気は戻らないが、ちょっとした会話なら支障はないようだ。

「で。お前、あんな所で何してたんだ？」
「…ちょっとね。考え事してたら冷えたみたい」

　悔しそうにぼやいたベロニカが、お茶を飲み干してサイドテールへ戻す。あまり突っ込んで聞かれたくない気配を察知して、カミュは道具袋に手を伸ばした。
　先ほどイレブンと整理したばかりだが、最近装備を変えたため、奥の方に目的のものがあるようだ。

「……アンタまさか、ヘンなもの出そうとしてるんじゃないでしょ

うね」
「あ？　なんだよ、ヘンなもんって」

　毛布を引き上げて疑わしい目を向けてくるベロニカに返しつつ、奥底から探し物を引っ張り出す。
　ばさり、と広がった大盗賊のマントを前に、ベロニカが胸を撫で下ろすのが分かった。

「例の本なら、たぶん爺さんとこにあるぞ」
「…そ、そんなの訊いてないわよ！」
「気になってるのかと思ってな」
「なってない！」

　むきになって否定してくるベロニカの声に、だいぶ張りが戻ってきた。
　軽口を叩いてそれを確認しつつ、取り出したマントを毛布の上からかけてやる。

「…あ……」
「ないよりマシだろ。一応かけとけ」
「…ありがと。優しいわね」
「そうか？　お前こそ今日は素直だな」
「お礼はちゃんと言うわよ」

　ふくれっ面をつくるベロニカに、へえ？　と視線を向ければ、益々その頬をふくらませる。他愛のない言い合いを重ねてベロニカの調子を確認していく。色のなかった頬にほんのり朱が差し、硬かった表情もやわらかく解れてきた。
　ベロニカがお茶のおかわりを飲み終えた頃に、カミュはベッドから腰を上げた。

「…カミュ？」
「お子様はそろそろ寝る時間だろ？　オレはちょっと一杯ひっかけ

てくるから、お前はもう寝ろ」
「…また子ども扱いして！」

　横になっていたベロニカに毛布とマントをかけなおす。だいぶ体調が良くなった証拠だろう、怒気のこもった声が飛んできた。安堵の代わりに意地悪く笑って見せる。
　子ども扱いだと憤慨してくれて構わない、寧ろそれがカミュの狙いだった。
　そうしてベロニカの不満を煽り、部屋を出て行こうとドアノブに手をかける。その時だった。

「──ねえ、寒い、」
「……飲み物、もらってくるか？」

　引き止めるように紡がれた声は、くだらないやりとりをしていた数刻前とは違って、どこか硬い。
　ドアノブに手をかけたまま振り返ると、背中を向けたベロニカは、かろうじて分かる程度に首を振る。
　毛布にマント、ホカホカストーン以外に身体を温める方法と言っても、温かい飲み物くらいしか思い付かないカミュは思案顔で腕を組んだ。

「…ホカホカストーン、もっともらってくるか？」

　ふるり、と三つ編みが揺れる。

「…部屋の風呂使うか？」

　ぶん、とベロニカが首を振る。

「もう一回蒸し風呂行くか？」

　ぶんぶん、とまた首を振る。絞り出した案をにべもなく却下され、正直なところお手上げだ。

部屋の鍵をくるくる回しながら考え込んでいると、痺れを切らしたベロニカが、ごろりと寝返りを打ち、こちらを向く。苛立ちと羞恥が綯い交ぜになったような表情で、キッと睨め付けてくる。

「寒いって言ってるんだから、ここに居なさいよ…！」
「は？　……おい…オレは湯たんぽかよ」
「だ、だってアンタ、お酒飲んでたでしょ？　さっき温かかったもの！」

　ベッドまで引き返し、わざわざしゃがみ込んでまじまじとベロニカを見つめると、微妙に視線を逸らされる。
　さっき、と言うのは、ヤヤクの社から抱えて宿屋に戻ってくる時のことだろう。そんなに酒の匂いがしたのか。
　自分ではあまり分からないが、酒を飲めないベロニカは匂いですぐに分かったのだろう。合点がいって、意識をベロニカに戻す。目を逸らされる。あちこち彷徨うベロニカの紫がかった瞳が、らしくないことを口走っていて恥ずかしいのだと物語っていた。
　珍しい反応が面白かったからか、酒のせいで気が大きくなっていたとでも言うべきか、ついいつもの悪戯心に火が付いた。

「そんなに寒いなら、添い寝してやろうか？」

　イレブンが見たら引きそうなほど意地の悪い笑みを浮かべている自覚があった。ベロニカがどういう反応をするにせよ、カミュに不都合はない。
　ふくれっ面を爆発させて罵倒が飛んでくるなら元気な証拠で良し、何を言われたかすぐには分からなくて段々と顔が赤くなり口をパクパクさせるのも面白い、怒りのあまり子ども扱いしないでと追い出されるのも、カミュとしては都合が良い。

　にやにやとしたまま、ん？　とベロニカに顔を寄せる。
　ぐっと言葉を詰まらせたベロニカは、噛み締めていた唇をゆっく

り開き、のそのそとベッドにスペースをつくった。

「……ふん。言ったからには、湯たんぽらしく温めてよね」
「あ？」

　こいつは一体なにを言ってるんだ？　悪魔にも通じる満面の笑みに、びしりと罅が入った音さえ聞こえた気がする。頭の回転は速いほうだと自負しているカミュだが、ベロニカの言葉を脳が処理できない。

「は、早く入りなさいよ！　寒いんだから…」
「……おいおい。マジか」

　恥ずかしさを怒気で覆い隠すことに失敗したような声音で、ベロニカが捲し立てる。カミュはぎこちなく空いたスペースを眺めて、心を落ち着けるために深呼吸した。

　ここはイレブンとの相部屋だ。いずれ相棒が帰ってくるとはいえ、密室に男と２人きりというのはやっぱりマズイだろうと判断して部屋を出て行こうとしたのに、事態は最も避けなければいけない方向へと発展しようとしている。
　具合が悪かったせいか、いつもより素直なベロニカ、酒が入って揺らぎやすい理性、イレブンのお節介によって胸を叩く想い。極め付けは目の前、ベッドに入って添い寝を所望するベロニカだ。
　見た目は子どもでも、中身は年相応の女だと知っている。本来の姿を見たことのあるカミュが、憎からず思っている相手の大人の姿を思い出して悶々としてしまうのは自然なことだった。

「…なによ、アンタが言い出したんじゃない。男に二言はないでしょ？」
「……騎士に二言はねえけどよ」

　完全に読みが外れてしまった。ぼそりと聞こえない程度に言い返して、ガリガリと頭を掻く。

日頃からの子ども扱いが、まさかこんなピンポイントで仇になるとは。

のろのろと立ち上がれば、ベロニカの視線が追いかけてくる。不安げな眼差し。その不安がどういった意味合いのものなのか、考えられる程の余裕はない。
単に具合が悪くて人恋しいだとか、本当にただ湯たんぽ代わりの何かが欲しいだけなら自分が悪者になるだけで済むが、そうじゃなかった場合、つまりベロニカが他ならぬカミュに傍に居て欲しいと欠片でも思っていたとしたら、これを断るとベロニカを深く傷付けてしまう。

「……」

立ち上がっても、ベロニカの意識は外れない。
これは退路を断たれたな、と独りごちる。自分で招いた状況とはいえ、不可抗力が重なりすぎだった。
マジかよ、と言葉には出さずにもう一度天井を仰いで、聞こえないように息を吐く。

「…文句言うなよ」

主語を濁したままぶっきらぼうに断りを入れて、覚悟を決めたカミュはベロニカの横たわるベッドに潜り込んだ。

＊＊＊

「──…おい、寒いんじゃねえのかよ」
「寒いわよ…」
「ならもっとこっち来いよ」

そんなこと言われても困る。背中にかかる声に、僅かに呆れが混ざっていることには気が付いたものの、振り向けるわけがない。冷えきっていた手足とは逆に心臓がうるさく鳴って、頬が熱い。

　添い寝するか、と言い出したのはカミュで、それを了承したのはベロニカだ。
　なんとなく一人残されるのが嫌だったのもあるし、カミュのことを知りたい気持ちがカミュを引き止めてしまったのもある。

　声をかけられたカミュは少し逡巡した後、あっさりと同じ布団に入ってきた。
　やっぱり子ども扱いされている。気遣う声にもそれが見て取れた。
　これは女扱いではなく、子ども扱い。誰がどう見てもベロニカの身体は子どもなのだ。

　仕方ないとはいえ、ほんの少しも意識されなかったのは胸が痛い。ほら見なさいよ、と蒸し風呂で好き勝手言っていたセーニャとマルティナに八つ当たりをしてしまう。
　悲しい筈なのに心臓だけが状況を意識して、心と身体がちぐはぐだ。

　宿屋のベッドは少し埃っぽい匂いがするのに、マントと背後の温もりから、仄かにカミュの匂いがする。
　意識してるのも緊張してるのも、なにかを期待したのも自分だけだと思うと、悔しくて苛立たしい。そんな夢を見た甘ったるい自分の不甲斐なさに、背中を丸める。

「…ベロニカ、」

　それを寒がっているものと見て取ったのか、カミュの呼び声がさっきより近くで落ちた。
　するりと回ってきた腕にやんわり抱き寄せられるのが分かって、

思わず全身に妙な力が入る。そのせいもあったのか、ころんと一回転したベロニカは、青い眼を下から見上げるかたちで、カミュと見つめ合うことになってしまった。

「…っ」
「おっと悪い、転がるとは思わなかった」

　びっくりして息を飲むベロニカと違い、カミュはひょいと腕を退けて、飄々としている。
　向かい合う体勢となってアワアワしているベロニカに構わず、カミュが布団をかけなおした。更にその上からマントがかぶさる。次いで、カミュの脚が布団の中でゴソゴソ動きだす。意図が読めないのと、状況についていけないベロニカは、ただ目を白黒させている。

　ゴソゴソ動いていたカミュの膝がベロニカの爪先に触れたが、どうにもやりたいことが上手くいかないらしい。
　ふと無表情になったカミュは、布団に腕を突っ込んで、ベロニカの足元をまさぐった。

「へ、変態！！」
「文句言うなって言ったろうが」

　カミュの服が、素足に擦れてくすぐったい。驚きのあまり悲鳴を上げたが、カミュはふんと鼻を鳴らして一蹴する。ちっとも相手にされていないようだった。叫んだ後で、密やかに肩を落とす。

「おい、ちゃんと抱えてろよ。足元から冷えるんだぞ」
「え…あ、ああ。そうね…」
「ここでいいか？」
「…ありがとう」

　ホカホカストーンの詰まった麻袋をベロニカの足元に置いて、カミュの腕が布団から出てくる。

なんだ、そういうことだったの、とホッとした反面、やっぱり子ども扱いされていると感じる。この短い間にこんなにも思い知らされるなんて、とベロニカは俯いた。

「なあ、寝るなら髪解いてやろうか」

　枕の位置を整えたかと思えば、今度はカミュの片腕がベロニカの頭のあたりに投げ出される。
　いつもより優しい温度にのろのろ顔を上げると、それを了承と見做したのか、カミュの手が三つ編みに伸びてくる。意外と慣れた手付きでするりとヘアゴムを抜き取るカミュの眼の色がいつもと違った。

　きっと、妹さんのことを思い出しているんだわ。
　青い眼の優しさが遠くて、こんなに近いのに寂しくなってくる。寂寞を隠せない弱気な自分に気が付いて、具合が悪い証拠ね、と苦くわらった。

「…意外と上手いじゃない」
「まあ、妹いるからな」

　ほんの少し照れくさそうに答える。
　やっぱり、と虚しい溜め息を布団に吸い込ませたところで、カミュの腕が動いた。

「なによ」
「なにって、腕枕」
「は？」
「寒いんだろ。なら、もっとくっついてた方がいいのかと思ったんだが」

　まるで膝枕と同じような調子で、カミュが言う。
　確かにキャンプではよく膝を借りているが、膝枕と腕枕では雲泥の差がある。ここはキャンプ場ではなく、２人きりの部屋で、なお

かつベッドの上なのだ。

　胸を圧迫する苦しさも寂しさも限界だった。淡い優しさに包まれれば包まれる程、惨めな気分になる。
　やっぱり、子どもの身体は不便だ。体力がないので仲間に迷惑をかけるし、目の前の男にちっともレディとして見てもらえない。
　普段の言動を思い返すと、淑女と言うには少しお淑やかさが足りない自覚はあるが、勇者を導く双賢の片割れとして生まれたのもあって、このくらい強（したた）かでなければ生きていけないと、自らの性格をポジティブに捉えてきたベロニカだが、中身はごく普通の年頃の女性であることも、また事実であった。
　ここで涙を見せるのは癪なので、震えそうになる唇で睨め付ける。

「――アンタは……誰にでも、こういうこと、…するの？」

　どんな返答があるにせよ、あっそ、の一言を放って寝てしまおう。不貞腐れた子どものふりをして、涙を隠してしまおう。軋む心にそう決めて問いかけると、溜め息に近い、迷うような間があった。
　顔を見る気にもなれずに、自らの小さな胸元に視線を定めていると、ふと無骨な指が頬を滑った。
　指先に込められた温もりに逆らえずに、ゆるゆると顔を上げる。

「そんなわけあるか」

　優しい眼に切なさが混じったのを確かめるより先に、強い意志を伴ったカミュの顔が近付いてきて、頬を滑った手が前髪をさらりと退ける。

脳裏を過ぎった未来予測に、そんなわけないでしょ、と理性が激しく首を振る。
　夢を見てしまう心と、それを否定する頭が、ベロニカをその場に縛り付けた。その隙に、カミュの手が、顔が、温もりが離れていく。額にやわく触れた吐息に混乱して、眩暈がする。
　惚けたまま視線を上げると、見たことのない顔をしたカミュが、ふいっとそっぽを向いた。

「──分かったら、もう寝ろ」
「──……え。な、なにが…え？　アンタ、今なにして…」

　思考回路が渋滞を起こす。ホカホカストーンに触れているつま先よりも頬が、どこか名残惜し気な吐息を受け止めた額が熱い。
　お酒なんて一滴も口にしていないのに、呂律がまわらなくてもどかしい。
　しどろもどろになりながら、現実を確かめようと言葉を探すベロニカに、カミュはじろりと一瞥をくれて、この鈍感が、これだからおチビちゃんは、と言いたげだ。
　それでも負けじとカミュを見つめること数秒、観念したのか、いつも飄々としている元・盗賊は忌々しげに口を開く。

「──酒の入った男のベットに寝転んで誘ってきたのはお前だし、最初に文句言うなよって言っただろ。オレがホントにお前を子ども扱いしてたなら、今頃ユグノア子守唄でも歌ってやってるだろうよ」

　一気に捲し立てられて、流石の天才魔道士も処理が追い付かない。
　じわじわとカミュの言葉、カミュの行動の一つひとつを反芻し、今しがた言われたばかりのことと当て嵌めていく。

　ぽかんとしたまま、ぐんぐん体温が上昇していくのが分かった。
　彷徨う眼差しに嘘や一時（いっとき）の気の迷いの類がないこと

を思い知って、強力なメダパニにかかってしまったかのようだ。思考が追い付かなくて呼吸を忘れる。
　惚けた顔で見つめる先、耐えきれなくなったのか、舌打ちしたカミュは無理矢理ベロニカを抱え込んだ。

「っ、ぷは…ちょ、ちょっと！　レディは優しく扱いなさいよ、苦しいじゃない…！」
「文句言うなって言ったろ。それにお前、これ以上女扱いしたらどうなるか分かってんのかよ」
「え」
「鍵かけときゃイレブンは入って来れねえが、そういうのをご所望か？」
「え、えっ？　……っ！！　バ…バッカじゃないの、この変態！」
「だから大人しく寝ろって言ったんだよ、危機感のねえこのお子ちゃまは！」

　ぎゃいぎゃいと言い合いながらも、カミュの腕はベロニカを離すまいとがっちり固定されている。逃げ場はない。逃げ場はないが、カミュがベロニカの意思を尊重せずにこれ以上何かするとも思えない。心臓は壊れそうな程おかしなリズムで軋んでいるのに、不思議な信頼感と安心感がベロニカを包み込む。
　抱き締めてくる腕の力強さにくらくらしながら、ベロニカは真っ赤な舌をべーっと出して、おやすみ、と頭突きをする勢いでカミュの胸板へ顔を埋めた。

「…文句だらけじゃねえか」

　優しく耳をくすぐった不満を装う声に、うっさい、と呟いて、ベロニカは苦労して瞼を下ろす。
　あれだけ凍えていた心も身体もふわふわしていて、泣きたいほど軋んでいた痛みは、あたたかい夜に溶けて消えていた。

■END.

イレブンとカミュの大人っぽいやりとり（いかがわしい意味で）が楽しかったです。
あとカミュの「鍵かけときゃイレブンは入って来れねえが、そういうのをご所望か？」…そのあたりも趣味です楽しかったです。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

（2017.10.02）